

経営資料

No.167 会社訪問

代表取締役社長  
アンドレアス・クリューガー氏



エッペンドルフ株式会社

会社プロフィール  
 代表者:代表取締役社長 アンドレアス・クリューガー  
 本社:〒101-0031 東京都千代田区東神田 2-4-5 東神田堀商ビル  
 TEL: 03-5825-2361 (代)  
 設立:平成9年7月  
 資本金:4億万円  
 従業員:69名(派遣社員含む)  
 事業内容:ピペット、自動分注システム、分注器、遠心機<sup>®</sup>、ミキサー、  
 分光計、DNA増幅装置、ディープフリーザー、ファーマンター、  
 バイオリアクター、CO<sub>2</sub>インキュベーター、シェーカー、  
 細胞操作システムなどの機器、およびチップ、試験管、  
 マイクロプレート、使い捨てバイオリアクターチューブなどの  
 消耗品の製造、開発、販売  
※エッペンドルフ・ハイマック・テクノロジーズ株式会社販売  
 URL: www.eppendorf.com/jp

聞き手:梅垣喜通(広報委員長)、岡田康弘(事務局長)、取材・撮影・編集:クリエイティブ・レイ(株)



世界的ブランド「エッペンドルフ」の  
ラボ製品を日本の大学や研究機関に提供

アンドレアス・クリューガー社長にお話を伺います。  
ドイツ本社と日本法人の歴史をお聞かせください。

本社のエッペンドルフ社は第二次世界大戦直後の1945年、ドイツのハンブルクで創業しました。以来、時代の変化に合わせ、ライフサイエンス分野を中心とした関連製品を提供してきました。日本法人は1997年にスタート、私はその設立から現在まで26年間、社長をつとめています。

御社の事業内容や製品についてお聞かせください。

大きく分類すると4つの分野の主力製品があります。1つ目がピペット、2つ目がピペット関連の消耗品、3つ目は遠心分離機をはじめとした検査機器、4つ目が微生物や細菌、ウイルスなどに関連したバイオプロセッシング機器です。

主力のピペットについて伺います。

実はピペットの製造・販売の先駆けは御社だそうですね。

1957年に極微量の液体を計量するためのピストン式のマイクロピペットがドイツ人の医師によって発明されました。エッペンドルフ社はその特許権を継承し、1961年に製造・販売を開始しました。そのピペットと、その後に関連された遠心分離機やミキサー、サーモスタット、各種消耗品によ

て、エッペンドルフ社のマイクロリットルシステムが構成され、世界の科学の発展を後押しする力となりました。

ピペットの他は、関連して使われることが多い分注器なども主力製品です。時代にあわせて進歩を遂げ、20年前からはロボットタイプも市場に提供しています。現在は世界中で2万人以上のユーザーがいらっしゃいます。

御社製品のお客様は、どのような方が多いのでしょうか。

一番多いのは、ライフサイエンス関係の研究機関です。例えば分子生物学や生命科学を研究する大学や、製薬会社をはじめとする企業の研究機関です。有名なところでは京都大学のiPS細胞の研究室、その関連のベンチャー企業などがあり、この京都大学のiPS細胞関連のお客様がピペットでは一番大きな販売先になっています。また日本の主な製薬メーカーで私どもの製品が使われています。

また、弊社は販売だけでなくメンテナンスも行っています。例えば、ピペットは1年に2回、製品の精度を定期点検しますが、メンテナンスをして証明書付きでお返しした場合は、約1万円です。性能が保証されてコストも割安になるので、お客様にも大変喜ばれています。

経営資料



Move It<sup>®</sup>  
マルチチャンネルピペット  
チップ間隔を調整することができる  
マルチチャンネルピペット

シングルチャンネルピペット  
手動・電動ピペット、連続分注器、自動分注  
システム等の幅広いラインアップ

チューブ  
ピペットチップ、マイクロ/コンカルチューブ、  
96/384プレート等の高品質プラスチック消  
耗品で、高い再現性とサンプルの安全を提供

Innova S44i  
インキュベーターシェーカー

サーモミキサーシリーズ  
温度コントロールとミキシングを  
同時に行うことが可能。水を介さな  
いドライなブロックタイプ仕様

CellXpert C170i CO<sub>2</sub>  
インキュベーター

卓上微量高速遠心機 5425R  
最大5mLまでの温度に敏感なサ  
ンプルに対応。最高回転速度でも  
4℃を維持する冷却テクノロジー

冷却遠心機 5910Ri  
大容量と高性能をコンパクトに  
直観的タッチスクリーンUIと高  
度な温度管理システム

製品のメンテナンスは日本で行えるのですか。

東京都江戸川区平井の事業所でメンテナンス出来る体制が整っています。巨大な倉庫と在庫を管理するオフィスでは、スムーズに出荷出来る体制になっています。

主力分野の2番目であるピペット関連の消耗品には、どんなものがありますか。

ピペットに使うチップや試験管があります。昔はガラスの試験管が多かったと思いますが、エッペンドルフ社は60年前にプラスチック素材の試験管を開発しました。今では研究者の間で弊社の試験管がスタンダードになっていて、ピペットに次いで最も売れている製品です。色々な研究風景が写真に載ると、私共の試験管やピペットが使われていることが非常に多く、嬉しく思います。

主力分野の3番目の遠心分離機、4番目のバイオプロセッシング関連機器について教えていただけますか。

弊社のマイクロリットルシステムの一部として、1964年に最初のマイクロ遠心機を発売しました。それ以来、高品質な遠心分離機を開発してきた歴史があり、広く信頼を得てきました。そして2020年、日本の工機ホールディングス社の

Himacブランドを買収し、新しいステップに踏み出しました。

Himacは、国産第一号となる遠心力144,700×gの遠心機を1955年に発売したところから長い歴史と技術を持つブランドです。こちらの遠心分離機の方は、弊社とは別に、エッペンドルフ・ハイマック・テクノロジーズ株式会社という組織で販売、メンテナンスなどを請け負っています。ですので、その会社と弊社の2社が日本にあるエッペンドルフの子会社です。

4つ目のバイオプロセッシング関連の機械は、弊社製品の世界での売上は大体100億円を超えています。しかし、日本ではまだ開拓中で、これから新商品を投入したりなど、販売を拡大していきたいと思っています。

他にも取り扱う機器は幅広く、例えば、サンプルを攪拌するシェーカーがあります。弊社のインキュベーターシェーカーシリーズは50年以上、世界中の研究者にご使用いただいています。最新のInnovaS44iは、シリーズ最大の収容力を実現し、2Lの三角フラスコクランプにして39個を搭載できるようになりました。

また、弊社独自のサーモトップというサンプルを加熱する製品も非常に人気があります。昔からサンプルの加熱は水で行われたり、また、結露による水滴が発生したりしてい

## 経営資料

したが、エッペンドルフ社のサーモトップは試験管の蓋と壁面への結露を確実に防ぎ、温度均一性を改善するものとなっています。この温める仕組みは半導体の技術を活用したものです。

その他にもマイナス80℃でサンプルを冷やすことが出来るディープフリーザー、さらにはCO<sub>2</sub>インキュベーターシェーカーなど、世界中で使用されている色々な種類の高品質な製品があります。

**日本法人がスタートした頃のことをお聞かせください。**

1997年に12人でスタートしました。現在会社は千代田区の東神田にありますが、当時は台東区にありました。最初はエッペンドルフ社の当時の日本代理店と、恐らく日本で初めて臨床検査の試薬を製造した龍角散グループの会社とで合弁会社を設立しました。その後2002年にエッペンドルフ本社の100%子会社となりました。ですので、今は龍角散グループとの資本関係などはありません。私は1997年から代表で当時は35歳でした。

**改めてドイツ本社の歴史をかいつまんでお話しください。**

終戦後、2人の物理学者（Heinrich NethelerとHans Hinz）が、ハンブルクのエッペンドルフ大学の付属の病院の敷地内で建物を借りて、戦争で壊れていた医療機器の修理をしたのがエッペンドルフ社の歴史の始まりです。

それから各年代、会社が発展するトピックがいくつかありました。1946年に発売された、筋肉や神経の損傷を診断、治療するためのEMS装置の開発、1954年には今もそのシリーズが多く、病院のラボで使用されているエッペンドルフ光度計、1961年には現在も弊社の看板商品であるマイクロピペットを発表、などです。そして80年代の終わり頃、臨床検査機器関連の開発を止める大きな方向転換があり、バイオやライフサイエンス関連で需要が高かったピペットやその消耗品、関連機器を取り扱うことに軸を置くようになりました。

もう一つの大きな動きは、1980年代終わりからグローバルな展開を開始し、アメリカで自社の子会社を設立しました。他の地域は1990年代に拡大が始まり、アジア圏ではまず1995年にマレーシアで子会社を設立しました。そして日本法人のスタートが1997年になります。この2つの大きな動きで、エッペンドルフは大きく成長しました。

**従業員や売上規模は、世界でどれくらいになるのですか。**

今は世界で4000人以上の社員がいて、売上は1500億円を超えていると思います。日本法人の従業員はエッペンドルフ・ハイマック・テクノロジーズ(株)を含め約270人になりました。アジアパシフィックですと、東南アジア、オーストラリア、韓国、インドなどをあわせて約600人、中国で目下約400人ですので、1000人強となります。この10年、20年で、売上も社員の人数も相当増えました。

**26年間、社長として喜びを感じたり、ご苦労を感じたり、印象に残っている出来事をお聞かせください。**

2つあります。1つは、2011年3月の東日本大震災です。もう1つは、2020年からの新型コロナウイルスです。ご存知のように世界でも日本でもPCR検査が必要になりました。弊社のピペットなどは、PCR検査に直接関係してくるものなので大変な忙しさになりました。

新型コロナウイルスが蔓延し始めた2020年の3月にアジアのマネージャー会議があり、私の上司が「これは大変なことになる、エッペンドルフ社として準備をしなくてはいけない」といったことを発言し、私は会議先からすぐに日本やドイツ本社に電話で連絡をとりました。ピペットなどこれまでのペースで生産してはとても足りない状況でしたので、本社に増産をお願いしました。その依頼に応えてくれて、製造を24時間体制に強化してくれました。

その“新型コロナウイルスとの闘い”を経験し、日本人の健康と社会を支える事ができたことを、非常に印象強く感じています。エッペンドルフ社は、第二次大戦後の荒廃していた中で創業した時に「社会を支えていくためにこの会社はある」ということが明確に定められていました。その理念を強く思いながら我々は日本で頑張り、そして世界中でリサーチャーが動き、本社も年中無休で働き、研究者の方やワクチンメーカー、保健所など行政関連の皆さんと共に新型コロナウイルスと闘うことが出来ました。

**感染対策も大変だったと思いますが、いかがでしたか。**

とても気を配りました。営業マンがお客様のところへ行けませんので、リモートでコンタクトをとらせていただき、社内の連絡もリモートになりました。また、保健所にPCR検査のキットを販売する我々に感染者が出てはいけませんので、社内でのPCR検査は週1回、社員全員に行っていました。

## 経営資料

そして今後は、日本で製造したエッペンドルフの製品を海外で販売するチャレンジが出来ればと思っています。つまり新工場を建設して国内、海外向けの製品を生産したい展望を持っています。エッペンドルフ社は世界で非常に強い販売力があるので、その強みと日本の製造能力を合わせることで、世界中での販売を拡大したいと思っています。



クリューガー社長 ショールームにて

**クリューガー社長の個人的なことも伺わせてください。御社で働く前から日本にお住まいだったのですか。**

はい。私は大阪大学の研究員でした。その後、理化学のメーカーで数年間勤務しました。日本に住み始めて32年になります。日本の女性と結婚し、もう大人になった子どもが2人いて、家族4人で東京都三鷹市に住んでいます。

**日本とドイツの違いを感じることはありますか。**

もちろんありますが、たとえ困るようなことを感じたとしても、私は責任者ですので、そのことに文句を言ってもはじまりません。自分を変えないと駄目なわけですので、そういう思いでやってきました。

**休日に楽しんでいる趣味などはございますか。**

趣味でトランペットを演奏します。地域の音楽バンドに所属していて、地元の方々と交流しています。例えば、ジャズクラブを貸し切りにして所属しているバンドで演奏を楽しむこともあります。私はあくまで趣味なので、とても下手です（笑）。ちなみに妻はプロのピアニストで、私は“天才”だと思っています。他に、お付き合いの程度でゴルフをします。

**協会へのご意見やご要望などがあればお願いします。**

ノーベル賞受賞者が何人も出ているように、日本には研究力の強さがありますが、社会的には自動車関連などの業界が強く、ライフサイエンスや製薬系などの世界での地位はあまり高くありません。ですので、理化学・製薬・ライフサイエンス関連に多く投資をして、世界をリードできる国になれるよう、科学機器協会から国や政府へ働きかけて欲しいと思います。

これは現在(2023年3月)も行っています。さらに、全員に抗原検査キットを持たせていて、体調に何か違和感があったらそのキットで検査してもらい、不安なら、会社に出なくてよいような形をとりました。

しかし、ピペットのメンテナンスは、家にいてリモートで行うことはできません。ですからシフト制を組んで、感染者が出たらそのシフトのチームは出て来なくてよいようにし、別のチームは動くことが出来る2チーム体制を作りました。シフトの入れ替えにも20分から30分の間をとって、接触がないようにしました。

**2011年の東日本大震災の時は、どんなご苦労があったのでしょうか。**

福島第一原発の事故が発生した後、ドイツ政府から基本的に東京に行ってはならないという通知が出ていましたので、一時的に会社は閉鎖しました。その間、私はドイツで役員会議に出席しました。役員会で、ドイツ政府の方針ではあるものの、やはり日本で仕事は続けていく必要があるという会社独自の判断が出て、事業は継続されました。とはいえ、羽田、成田のどちらもドイツ行きの飛行機がなかったので、大阪から韓国、ミュンヘンを経由してハンブルクへ行き、3日後にはまた逆の道筋で日本へ戻ってきました。

**御社の経営理念などをお聞かせください。**

創業以来「社会を支えていくために」というスローガンのもとに事業を続けています。ですので、日本の研究所などユーザーの皆さまを支え、日本の社会を支えるために、力を尽くしていくことが会社の理念です。

そして社会と共に、会社で働く社員の生活が安定して、仕事しやすい環境を作ることも大切にしています。日本でエッペンドルフ社がスタートしてからずっと変わらずに一緒に働いている社員が22人いて、結婚して子どもがいる家庭も多いです。そのように生活面が安定することは良い仕事を続けるのにとっても大切なことですので、そのためにも経営の安定を重視しています。

**現在の課題や今後の事業目標をお聞かせください。**

先ほど話したように、日本のエッペンドルフの子会社は2社あります。今よりもさらに連携を密にして、よりスムーズにお客様をサポートできるようにしたいと思っています。